

筑波山麓・里山の暮らし

高21回鴻巣(旧姓大久保)茂君は、1950(昭和25)年、筑波山麓の旧筑波町(現つくば市)平沢に、父大久保勝治様、母愛様の四男(長男は夭折)として生まれました。2020(令和2)年1月14日、高21回松井泰寿が、昭和30年代(1955~64年)の平沢での、里山の生活を伺いました。

【 】内は筆者による注記です。



筑波山系を背にし、水田地帯を前に建つ山口小学校(上)  
校倉・土倉・板倉の3棟が復元された平沢官衙遺跡(下)  
(いずれも鴻巣茂蔵)

平沢集落

平沢には、奈良時代から平安時代に掛けて、常陸国筑波郡の郡衙が置かれていました。現在、郡衙の跡地(平沢官衙遺跡)(注1)は、国の史跡に指定され、そこには、校倉・土倉・板倉の3棟が復元されています。生家の大久保家は、郡衙跡から約400m山側に入った所にあります。当時の戸数は約90、住民500人。8割が農家、他にサラリーマン世帯が10軒ほど。小売店が2軒、石材業などの自営が5軒ほどありました。平沢の山の石は、「オンジャク石」と呼ばれ、古くは古墳の石材としても使われていました。加工、出荷されてきました。

私が通った山口小学校は、1学年1クラスの小さな学校で、児童数は私の学年が1番多かったのですが、それでも35人ほどでした。1963(昭和38)年度には北条中学校に進みましたが、私たちが最後の卒業生となり、翌年度には、北条中は田井中とともに筑波東中学校になりました。2018(平成30)年4月には、旧筑波町の全ての小中学校が、つくば市立秀峰筑波義務教育学校に統合されましたが、各小中学校を中心に育まれてきた地域のコミュニティが消えていくのは、寂しい限りです。

子どもの仕事

大久保家は、代々農業を営んでおり、両親も、米・小麦・大麦・大豆・ジャガイモ・サツマイモ・野菜・茶・ホウキモロコシ(注2)などを作っていました。現在スパーに並んでいる野菜類は、殆どを栽培していました。屋敷には、柿・蜜柑・夏蜜柑・梅・李などの木があり、果物には不自由しませんでした。また、養蚕も営んでおり、年中、農作業に追われていました。そのため、両親・祖父増太郎・長兄勝弘・次兄直利と私との6人

家族が、毎日それぞれの仕事を受け持っていました。

私の仕事は、朝の家畜への餌遣りから始まります。農耕・運搬に使っていた馬(後に牛)には、切り藁と糠とを混ぜたものを飼料に入れて与えました。鶏には、雑穀・野菜屑や木の実を、たまたに近くの池や川などから獲ってきたアメリカザリガニを潰して与えていました。ザリガニを食べさせると卵の殻が赤みを帯びます。毎日2~3個の卵が採れ、食卓に上っていました。兎も飼っていました。道端に生えている雑草の葉を与えておけば、元気に育っていました。

また、学校から帰ると、風呂仕事が続いていました。それは、水汲みから始まります。敷地内にある井戸の水量が少なかったため、家の下を流れる沢の水も汲んで来て加えないと十分ではありません。バケツを両手にぶら下げて、沢から母屋側の外風呂小屋まで、50mの坂道を2~3回往復しました。燃料は薪です。電化製品は勿論、プロパンガスや石油コンロさえ普及していませんでした。風呂釜でも薪を燃やしました。薪に火を点けるためには、松葉や小枝が必要で、裏山へ行って、落ちてくる松葉を背負い籠一杯に浚って来ます。その時、小枝も一緒に拾い集めます。枯れた松葉は油分が多く、焚き付けには最適です。風呂だけでなく、竈【かまど】鍋・釜などを掛けて、その下で火を焚いて煮炊きするための設備【】の焚き付けにも使いました。風呂釜では、マッチで松葉に火を点け、小枝へ、薪へ、と燃える炎を移動させます。火吹き竹を使って焚き付けるのですが、初めは要領が分からず、煙ばかりでむせ返ることもしばしばでしたが、コツを覚えると簡単に火を点けられました。が、風呂が沸き上がるまでは風呂釜の側に付いて、薪をくべ続けなければ

なりません。その間は、漫画を夢中で読みました。当時、『少年』と『少年画報』が発行されていました【両誌とも昭和20年代に創刊され、40年代に休刊】が、小遣いが少なかったため、従兄弟が読み終えたものを貰って来ていました。特に、『鉄人28号』『赤銅鈴之助』『まぼろし探偵』の、正義が悪を倒す痛快さが最高でした。

風呂が沸くと、薪の燃え残りには火消し壺に入れ、消し炭【残った炭火や燃えた薪の火を消して作った炭】にします。この炭は、火鉢や炬燵で使ったり、火点きが良いので、木炭を火熾す際の火種にしたりします。

山の木々が唯一のエネルギー源の時代でしたので、冬になると、一家で、持ち山から1年分の燃料として、間伐材を何日も掛けて切り出して、木小屋に積み重ねて乾燥させておきます。特に「くぬぎ」10年くらいの間隔で伐採し、伐採後には直ぐに植林した【】は、木炭の材料になります。木炭は、養蚕で暖を取る時の必需品でした。隣家が炭焼き窯を持つていたので、頼んで焼いてもらいました。手間賃を焼き上がった木炭で払っていました。七輪が出回ると、大きな炉を必要としない練炭(注3)や豆炭(注4)の方が使い勝手が良く、北条【現つくば市北条】の燃料店から購入することで、木炭は、以前ほどは必要なくなりませんでした。

農作業

一年の農作業は、俵や縄、蓆作りから始まります。冬の雨の日には、父と母とが協力してやっていました。時には夜鍋することもありました。麦が芽を出すと、麦踏みです。これは子どもにもできますから、休みの日には、兄たちと一緒に手伝いました。春、雲雀が轉るようにになると、米作りが始まります。田起こし、

